盡未來際を盡くして、法華の版木を彫置かん、庶くは衆人摺写して広く諸国に流布し、互に興法利生し、自他共に咸佛せん、といふのですから、一山一寺の読誦の用にすることをいふやうな小さい目的や私ごとの開版ではなく、開放的な全国的普及を目的として、誰にでもこの版木で法華経を摺ることができたと思はれる趣旨が心性版のどの版にも刻記してあります。しかも一版で、二、三千部は鮮明に摺写できるのですから、一版三千部として十五版で四十五万部の法華経が刊行されたことになります。心性は興福寺の塔頭四恩院にゐた人です。中世初頭に於ける心性版法華経の普及は、想像にあまりあるものであはありませんか。日蓮聖人はこの心性版の版経を入手せられたものと見られます。現存の心性版の各版と註経の版経を比べますと、文字面の高さや行間の寸法も全く同じであり、字劃、字体も共通です。たゞ現存心性版に、寸分違はずぴつたり合致する版は見当りません。これは覆刻による微細な相違です。弘長三年第四度版はいくぶん文字が太目です。(巻頭写眞参照)ですから、第三度版以前の心性版の刊記を省いた摺写本が日蓮聖人書入本註法華経の版経であらうと推定され、心性の第一度から第三度までの中のどれかの版であると見て間違はないと思はれます。

註経には法華経八巻のほかに、開結二巻が具してあます。開結の版経で刊記の有る鎌倉時代のものは嘗て見聞したことがないので、何版といふことは私には不明です。春日版々式の開結版経は心性第四度版伝本にも一具の本として備はつてをり、その他にも鎌倉時代と見られる版を度々見うけることがありますが、その開版した人はわかりません。たゞ開結も鎌倉時代の春日版であるといふ概念的なことしかわかりません。

身延、中山の關係

——特に祈禱経及祈禱相伝書について——

影山堯雄

一、祈禱経について

1、宗祖御直筆の祈禱経と転写本

宗祖が文永十年正月廿八日佐渡に於て最蓮房に御與えになつた事はその送状によつて知る事が出來るが、その直筆が未だに見出されていない、たゞ甲州下山本国寺所藏の、天正三年七月十三日身延日叙師が写された原本となつたものが直筆であつたようにも思はれるけれども、それ以外には発見されないのは甚だ残念である。

祈禱経の転写本は室町のものが各地に見られるが、その中で今までに発見された最も古い写本は越後村上経王寺所藏の、常宣坊日體師の所持本であろう、その奥書によると、嘉吉二年霜

月三日辰尅書写畢るとしてある。その他は應仁三年卯月十五日京都妙満寺日遵師書写の上総東金本漸寺藏本、延德二年三月十八日円頓房日泰師が妙満寺で写された上総浜野本行寺の藏本などで、この頃のものには久遠親師のものもある。

2、祈禱経の相伝について

祈禱経は今では中山か身延かだけに伝えられたように思はれるが、実際はどうであつたろうか、祈禱経血脈によると宗祖から日向師へ伝えられ、それがまた平賀にも伝授されてをる。

大覚大僧正から朗源師への書狀によると、宗祖が御弟子の人々へ沢山に御書き與えになつたから、時によつて勘文も具略の相違もあつたろうとのことである。これらによると祈禱経は佐渡に諸弟子に御與えになり、各門流に伝えられたようである。それがいろ／＼の事情で或は伝承を失い或は重用せられた門流もある事となつたと察せれる。

二、祈禱相伝書について

こゝで相伝書というのは祈禱経の解説書を始め修法上の事を書いたものを一括した総称であるが、これについてその身延と中山との関係を見ようと思う。この相伝書は中山が元で身延へ伝えられたものか、身延から中山へ伝えたのか、今二三の文献によつて考えて見る。

身延所藏の藏書目錄について見ると

御祈禱経之事三卷文明十三年正月十二日　日朝在御判

祈禱経口決二卷　文明十三年五月　日朝在御判

祈禱経三頂口決　文明十三年　日妙

咒咀返守護　文亀元年六月　日妙

祈禱肝要　文亀三年七月　日顯

御符相伝二通　承正元年正月廿一日　日妙

などが見られる、これによると朝師以後この方面に力が注がれたことが知られる、

中山の祈禱法の相承について見ると、正和三年四月廿一日の日高師から日裕師への讓狀に「於御祈禱者任先例可奉勤行者也」とあり、延文六年三月六日の日裕師から日尊師への讓狀にも同様の文言が記されている。遠壽院文書によると天正十九年正月二十日の日侃師が「門弟中江可申渡三條々」を出して祈禱に対するいろ／＼の注意を與へられてある、さらに奥藏抄の奥書によれば

日侃聖人云自二祖師一日常相承日常代々日侃迄相承來貫主一人之相承餘法師縱及二身命一不レ可レ伝但可レ聞二口伝一也

と、今文献の上では中山の祈禱相伝の様子が跡づけ易い、また身延と中山とが別々に伝えられて來たように見受けられる。

それが室町の末どろから次第に両者の間に交渉が始まつたかに思はれる、即ち奥藏抄の奥書にとの書の相伝を次の如く記してをる。

相伝之師従二中山本明院一明乘院伝二貞戒一伝二泉乘坊一伝二積善坊一伝大乘

坊〈伝仙應坊〈伝後仙應坊〈伝後亦積善坊日閑〈伝権大律師日東（下略）

積善坊は身延であらうし、中山の本明院から身延の方へ伝はつたようである、察するに天正から慶長ごろのことかと思はれる更に堀内妙法寺所蔵の祈禱相伝鈔上巻の奥書に依てその伝承を辿ると、

九州光勝寺修善院秀賢大進

日南—日妙—日耀—日嶺—日眼—日叙

となり次に

永正十四年閏十月廿三日従日耀示日嶺

天文廿二年癸丑四月二日　日眼花押　　示　日　叙

とあるから室町期の末に近い頃である。日耀師は下総松崎顯実寺の常寂院日耀、日嶺師は中山蓮行坊日嶺であろうし日眼は本尊論資料巻二、一五三頁によると東昌房という。日叙師は恐らく身延久遠寺十五世宝蔵院の事であろう。これらによれば中山から身延の方へ伝えられたことが知られる。

ところが甲州小室妙法寺所蔵の心性遠師撰述の祈禱経瓶水鈔の奥書によると、寛永六年仲秋八日にこの書を紀州感應寺住持眞如院日逮師に伝授してある。この日逮師はのち堺の妙国寺へさらに中山法華経寺廿四世に輪番され、その在番中の寛文六年十月に祈禱禁制を厳守することを追記されてをる（遠壽院文書、ことから見ると、日逮師を通じて身延の祈禱相伝書も或は中山へ伝はつたかも知れない。

また身延の蔵書目錄を見ると、遠壽院日久師が元錄五年の五月から十二月に亘つて中山の修法相伝書を写して身延へ納められたものは十種以上である。即ち五、六を摘錄すると

祈禱経言上元祿五年五月十三日　遠壽院日久

遠離秘法　同年七月十三日　同

国禱誦文二通　同年七月十六日　同

疫神遠離教　同年同月同日　同

法華肝心加持誦文同年十月二十日　同

靈気教化　同年十月廿二日　同

正中山十箇條相伝同年十月廿六日　同

日久師はまた日逮師が省己日中師に、日中師は善通日順師に伝えた瓶水鈔を、身延に於て転写伝受してをる即ち

右之一軸者於身延七面山百日籠並七度参詣砌祈禱堂衆徒無碍庵善通日順依指南奉書写畢

元祿八乙亥五月二十日　中山徒遠壽院日久判

とその慎重にして敬虔な様子が窺はれよう。

また身延の方でも中山の祈禱伝書を相承した事が知られる、同じ目錄の次に

御祈禱口決血脈抄上下二巻従山中淨光院相承　長壽院日彰

疫神遠離祕法中山直抄也享保十五年　孝東院日彰
寄加持大事　一本　同
邪気靈気遠離祕法　日彰
中山生靈死靈遠離　孝東院日彰
御祈禱經　享保十五年八月廿五日　孝東院日彰

などの書名と伝受者が列ねられてある。なを日影師は初め長壽院といゝ、のち孝東院と改められたと察せられる。

六牙潮師が積善房日開伝に云はれたように身延流中山流と並び称せられていても、江戸中期頃の積善房流も遠壽院流もその内容をなす相伝書は互に交流していて相当密接な関係にあったことが察せられよう。

昭和廿七年十月廿一日稿

法華經成立史上に於ける見寶塔品の重要性

木村日紀

一、佛証覚の一法と能統一の法華經

法華經が最勝教たることは經それ自体の構成上に現はれてゐねばならぬ。その原型である囑累品までは、方便品を中心とする一類と、壽量品を中心とする一類との相互関係に於て構成されている。前者は迹門で「法の開権顯実」であり、后者は本門で「仏の開迹顯本」である。斯く所乘の「法」と能乘の「仏」との両面を具現した処に最勝教たる所以がある。更に仏教思想史から見ると、仏成道証覚の一法から開展した全仏教が法華經に統一されている。經には前者を「於一仏乘分別說三」といひ后者を「唯有一乘法無二亦無三」と表示されてある。斯く能統一の立場に立つ処に法華經の最勝教たる理由がある。

而して仏成道証覚の一法と能統一の教たる法華經とは全く同一立場に立つものであるから、仏成道に於て所証の「法」と能証の「人」とが相互関係即ち融合してゐる如く法華經も本迹具現、所乘能相互関係に於て構成され而もその融合点として見宝塔品のある処に最勝教たる意義がある。

二、佛成道の体験と法華經の中心問題

經の文献から法華經の中心問題を検討すると、それが「仏知見」の開示悟入にあることが確信できる。それは「唯以一大事因緣故出現於世」とあるからである。処でその「仏知見」とは何を指すのか。經に「世尊法久後要当說真実」とある。この真実」が「仏知見」でなくてはならぬ。また「道場所得法」ともある。この「所得法」が「仏知見」でなくてはならぬ。処でこの文に該当する梵本では「Bodhi manda」（菩提座）とあるこれは金剛宝座を意味し「成道」其自体を指すのであり、仏証